1949: マックス・ブラデック
共産主義者の異端児

「社会正義への、階級闘争よりもより良き道」

マックス・ブラデックは、1920 年代にドイツの若い炭鉱夫として共産党に入党しました。何万人もの共産党員が投獄されたり命を落としたりしたヒトラーの時代にも、彼は忠誠を誓い続けました。1949 年にコー会議場に到着したとき、肺は珪肺症(注：結晶シリカ[ケイ酸]の粉塵を吸入することで生じる職業性肺疾患の一種)に冒されており、もはや炭鉱で働くことはできなくなっていました。彼は地元メーレス地区の炭鉱のひとつで労働者評議会の議長を務め、ノルトライン＝ヴェストファーレン州の党執行委員でもありました。

マックスは、階級闘争よりも社会正義（注：公正で平等な社会を実現するための、法の下の平等や同一労働・同一賃金など、社会通念上正しいと判断される道理）を作り上げるためのより良い道があると確信して、コーを去りました。マックスは、資本家は自分達のやり方を変えることができて、世界平和のためには「敵を味方にする」ことが必要であることを目の当りにしました。彼はコーに来ていた他のドイツ人共産党員とともに党本部を訪れ、道徳的再武装（MRA）の「革命的な思想」についてもっと学ぶよう勧めました。

その数カ月前に MRA の国際チームが『忘れられた要素』（The Forgotten Factor）という劇を携えてメーレス地区を訪れました。その劇はすべての側が考え方を改めることによって解決される産業紛争を描いた劇で、マックスはその時に初めて MRA の思想に出会いました。彼らの訪問は、ドイツの石炭・鉄鋼産業の中心地であるルール地方での 2 年にわたるキャンペーンの一環でした。この地域はドイツの復興に不可欠であり、労使関係についてのマルクス主義やその他の思想の実験場になっていました。1948 年から 1950 年にかけて、ルール地方では約 12 万人がこの MRA の劇を観ました。

それぞれの町で、劇の出演者とスタッフはホームステイしました。マックスと妻のグレーテは、3LDK の家の居間のソファを、若いノルウェー人のイエンツ・ウィルヘルムセンに提供しました。マックスとイエンツは毎晩遅くまでイデオロギー論争を繰り広げていました。

イエンツが朝の静な時間で思いがけない考えが浮かぶまでは、二人の間にほとんど進展はありませんでした。その考えとは、「マックスに対し彼が人生を捧げた共産主義の悪いところばかりを説教するのをやめる。その代わりに、自分がマックスに説いていることを実践する上で、どこに問題があるか、彼に話せ」ということでした。その晩、イエンツはマックスに、自分が理想通りに生きられなかった時のことを話しました。驚いたことに、マックスはそれに応え始めました。「私たちふたりのイデオロギー的、政治的視点はまだかけ離れていたが、ふたりの間にはある種の信頼が芽生えた。」

劇がモアーズを去った後、町の政治活動家と労働組合員が一堂に会して、その接点を話し合いました。共産主義者たちは声を荒げ、MRA が階級闘争のゲームを演じていると非難しました。最後にマックスが爆弾発言をしました。「諸君、我々はマルクス主義がテーゼで、資本主義がアンチテーゼであることを知っている。MRA はもしかするとそれらを統合するものになるかも知れない。」

この提案は異端視された。マックスと彼の同僚がコーに行ったとき、事態はさらに悪化しました。共産党にMRAの考え方を採用するよう迫ったところ、ついに彼らは党から追い出され、中傷と脅迫のキャンペーンにさらされました。しかし、労働者評議会の選挙が行われると、マックスとその同僚のほとんどは以前にも増して多くの票を獲得しました。
この構図はルール全域で繰り返されました。1948年から1950年にかけて、石炭・鉄鋼労使協議会における共産党の議席占有率は72%から25%に低下しました。労使関係の改善は、重工業における労使共同の意思決定に関する新法に反映され、従業員に取締役会の議席の半分を与え、会社の日常的な運営が3人の取締役（1人は組合が提案）の手に委ねられました。

1950年、ノルトライン＝ヴェストファーレン州経済相のアルトゥール・シュトラーターは、「MRAのイデオロギーがドイツの石炭生産における「ボトルネック（障害による停滞）」を解消した」と述べました。ドイツの戦後の経済発展の奇跡には多くの要因が関与していますが、労働者と経営陣の双方のコー訪問もそのひとつでした。

メアリー・リーン